



# NPO通信

## 2013年度前期 受講生募集開始



明けましておめでとうございます。年が明けるといよいよ来年度の講座の受講生募集が始まります。

1月11日(金)に受講生募集案内(総合チラシ)がプラザへ納品されました。皆様のお手元にも届き各講座のカリキュラムを興味津々でご覧の事と思います。受講生募集スケジュールは以下の通りです。

1月12日(土)	申込み受付開始
1月14日(月)	新聞折り込みで総合チラシを市内及び周辺地域へ配布
1月中旬	総合チラシを市内図書館、市民館など公共施設に配布
2月5日(火)～8日(金)	新規受講生募集説明会
2月15日(金)	会員・聴講生申込み締め切り
2月末	受講決定通知及び受講料振込み用紙等発送



2013年度は会員登録の切り替え年です。新たに2年会員、1年会員を募集いたします。専攻分野ごとに多彩な講座やワークショップがありますので、会員登録なされて新しい知的世界を開拓してみたいかがでしょうか。

### 注目の講座紹介！！

- ◆2013年度はエクセレントⅡ、Ⅲのテーマが大きく変わります。  
エクセレントⅡ：「ヨーロッパ文化の源流をたどる—旧約聖書の世界」  
エクセレントⅢ：「江戸時代を考える—現代日本のみちしるべとして」  
\*エクセレントⅠの「世界を旅する⑨」は、ドイツ・ツアーです。

ホームページから受講申込みが出来ます。  
ホームページからお申し込み頂いた場合、受講料の振り込み手数料が無料になります。

- ◆コーディネーターが交替された講座では  
暮らしの中の科学 → 「新しい科学の世界」  
映像・メディア：「TVは社会を写す鏡・ドキュメンタリー制作インサイド」  
が始まります。



- ◆短期集中講座では瀬戸岡先生が  
現代人の生活と文化を再考するための〈とっておきの三題〉  
と題してひそかに温められてきたテーマで講座を担当なさいます。

会員・聴講生 申込み締め切り

2月15日(金)

追加申込みは3月30日(土)まで

- ◆地域協働講座では  
大学連携：「日本映画の巨匠たち—ひと味がう映画史講座」  
自分史：「MY HISTORY—自分史をつくる」等、魅力ある多彩な講座が新たに始まります。



## 修了申請のお願い

2011年度に新しい会員制度に変わり2年が経過しました。新制度での初の修了生となります。「受講生のつどい」で修了証の授与と記念品をお渡しいたします。出来るだけ多くの方が修了申請し、学習の区切りとするとともに「受講生のつどい」にご参加いただき会を盛り上げていただきたいと思います。アカデミーは生涯学習機関です。次年度もまた会員登録をお願いします。

### 1. 修了申請の対象と必要単位

対象：2年会員

必要単位：専攻コースを主体として30単位以上取得

新制度に切り替わって最初の修了の為、1年会員、聴講生時代の単位は加算されません。

### 2. 申請の流れ

1月～2月：修了申請書を該当者に配布します。

2月末：学長の承認と「受講生のつどい」への招待通知をします。

3月8日：「受講生のつどい」で修了証の授与をします。

なお、修了見込みとなる方宛に、予め取得単位（含：取得見込み単位）を記入した申請書をお送りいたします。必要事項を記入して事務局に提出してください。

## 新規受講生募集説明会のご案内

初めて受講を希望する方を対象とし、講座・ワークショップの募集説明会を開催いたします。アカデミーのあらましや講座内容についてお話しします。まだ受講していないお友達や知人に参加をお勧め下さい。（参加費、申込み不要です。）

月 日	2月5日（火）	2月6日（水）	2月7日（木）	2月8日（金）
会 場	中原市民館 2F 第3・4会議室	高津市民館 11F 第4会議室	ミュージア川崎 4F 研修室1	麻生市民館 3F 第1会議室
時 間	14：00～15：30	14：00～15：30	14：00～15：30	14：00～15：30



### 受講生のつどい

開催日；3月8日（金）

時 間；12時30分開場 13時00分～15時30分

会 場；生涯学習プラザ 401教室

参加対象者；アカデミー受講生（会費、申込み不要）

\*今年度は2年ぶりの修了式をメインに、講師、運営世話人を交えて一年間の感謝と今後の更なる学習飛躍を目指して、親睦交流を深める会として「受講生のつどい」を開催します。修了証授与式後には桂米多朗師匠の落語会を企画しています。

コーディネーターからのメッセージ

## 「足尾銅山の光と影—写真データベースを作成して」

科学ジャーナリスト 小出 五郎

(カリキュラム企画編成委員 映像・メディアコース)

映像・メディア講座 ◇金曜日 13:00~14:30 ◇生涯学習プラザ

足尾銅山は公害の原点として知られています。2013年に没後100年となる田中正造は、鉍毒反対運動の指導者として信念を貫き、いまなお義人として尊敬を集めています。

足尾銅山は、明治政府の国策「殖産興業」を象徴する鉍山都市でした。その足尾の光と影を、明治16年(1883年)から昭和4年(1929年)までの46年間、白黒の写真に撮り続けた写真師がいました。見事なあごひげの持ち主だったことから「ひげ武者先生」と呼ばれた小野崎一徳です。

一徳は足尾の町を拠点に、欧米から導入した銅山の最先端技術、最盛期4万人を越えた人々の営み、政府の命令で実行された鉍毒防止工事、その効果が見えなかった環境破壊の惨状など、現在のようにデジカメではない時代に驚くほど鮮明な数千枚の写真に記録しました。写真を眺めると、足尾銅山は鉍毒発生源として負のイメージが強烈ですが、日本の近代化に貢献した正の側面もあることがよくわかります。

一徳の写真は、戦争の混乱期に散逸してしまいました。それをふたたび集めたのは、一徳の孫にあたる小野崎敏さんです。ただ、ふるさとの貴重な記録なのに写真にはキャプション(説明)がありませんでした。写真の内容がわかる人々は高齢者ばかりで、このままでは貴重な歴史が埋もれてしまいます。

そこで私たちは3年前に「足尾プロジェクト」というグループをつくりました。関係者から聞き書きをして写真一枚ごとにキャプションを付してデータベース化し、webで公表することを目標にしました。英文キャプションもつけて国際的な発信も行うことにしました。

プロジェクトメンバーの頑張りのおかげで、2012年3月にデータベースを一部公開しました。すると、すぐに研究者や出版社などから問い合わせがありました。小学生から来たのは予想外でした。海外からのアクセスもあり、webの威力を改めて認識することになりました。

「映像・メディア」の講義の中で一度みなさんにもご紹介したいと考えています。

## 理事会報告

(詳細は議事録と資料をご覧ください。事務局に常備してあります。)

「2012年度12月理事会」2012年12月19日(水) 15:00~17:15

審議事項: 4件 報告事項: 18件

主な審議事項

- ①学習支援事業の立ち上げについて
- ②事務局職員の募集について
- ③企業連携講座のコーディネーター費用の支払いについて
- ④平成24年度11月第5回理事会の議事録について

主な報告事項

- ①フェスタの報告について
- ②三者連絡会議の報告について
- ③野外学習のあり方再検討委員会(仮題)の立ち上げについて
- ④運営代表世話人会議の報告
- ⑤第二次中期経営計画の作成について
- ⑥旧音楽ワークショップ7問題進捗状況について
- ⑦受講生のつどいについて
- ⑧会議の公開規程について
- ⑨20周年記念事業について

理事長の司会で、メリハリのついた討議を真剣に行いました。

「受講生募集チラシ」  
配布のご協力  
お願いします。



お友達、ご近所のお知り合い、サークルのお仲間などに差し上げてください。

## 本の世界

# 『家族という意志』 芹沢 俊介 岩波新書



芹沢先生が2012年度後期「人間学」講座で2回にわたり「家族という意志」をテーマとしてお話し、感銘を与えました。紹介の本は著者が自己の体験に基づき、多年の思索を結晶化した力作です。「家族」に何故「意志」というような言葉を敢えて結びつけたのでしょうか。ここに、多年、「家族」について思索を重ねてこられた著者の問題意識が凝集されています。「家族論」に切り込むキー概念に「対幻想」をたて、これに基づいて「夫婦」、「親子」、「兄弟」のあり方を鋭く分析してゆきます。家族のつながりを維持してきた「対幻想」と家族をつなぐ回路に自己本位主義的な個が立ちはだかる時代になり、家族のつながりが急速に崩れて行く過程を自己の経験と統計資料の分析を通して綿密に論じられています。最後に、「家族」を維持する為には、自己本位主義的な個の力に抗して「対幻想」を維持しようとする意志の必要が強調されています。読み易い本ではありませんが、精読されれば必ず収穫があると思います。また、対照的な位置に上野千鶴子『おひとりさまの老後』（文春文庫）があります。ここでは「おひとりさまの女性」の老後の過ごし方が軽快な語り口で述べられています。あわせて読まれることをお勧めいたします。

### 序章 「はかなさ」と「よるべなさ」

子どもにとっての家族とはなんであるかが「はかなさ」と「よるべなさ」というキーワードを用いながら論じられています。

### 第1章 家族論の時代

家族論をめぐる著者個人のエピソードを自分史的にまとめられ、キー概念である「対幻想」のあり方が論じられています。「この人を守ってあげたい」「この人に寄りかかりたい」・・・これは、二人だけの関係の中で、「この人」という存在のあり方に強く反応して生じた内心の思いです。特定の「この人」との二人の生活過程において、そこで生み出された様々な思い、葛藤、喜び、悲しみ、愛、憎しみ、暮らしのこと、子どものこと、親の老いのこと、等々、いずれ一つとっても対幻想の表れでないものはありません。

### 第2章 「いのち」から考える

「親子」になるとはどういうことかを「いのちの受けとめ手」の存在の見地から論じられています。

### 第3章 自殺と中絶から見えてくるもの

「対幻想」をキー概念として対幻想の消失による男性の自殺と対幻想との葛藤（女性）からの人工妊娠中絶を統計資料の分析に基づいて論じられています。

### 第4章 老いるいのちをまえにして

自己と老いる両親との関係を通して「する」「できる」から「ある」に移行してゆく両親との関係の維持と「対幻想」のあり方が体験的に語られています。

### 第5章 家族の絆を問いなおす

自己本位主義的傾向が思想的にも社会システムの的にも浸透してゆくにつれて、「対幻想」が消失してゆく過程が多面的に論じられます。

### 終章 「一緒の誰か」がいれば、一人、生きてゆける

結論です。一緒にしようとする「意志」のみが家族とのつながりを維持する条件であることが強調されています。

### 『編集後記』 新しき年の始めの初春の 今日降る雪のいや重けよごと

2013年度前期のカリキュラムが決まり、「受講生募集」が始まりました。受講生の皆様にとって、今年がよき年でありますよう祈念いたします。より充実したアカデミーをともに作り上げてゆきましょう。

編集責任者：折居 晃一、田辺 初子、高橋 富夫、原 宏、西山 拓